

器官から骨相へ

——ガルとシュプルツハイム

川 名 雄一郎

1. はじめに

頭蓋の形状に着目することによって人間の本性や性格を研究する生理学理論としての骨相学は1790年代にウィーンの医師フランツ・ヨーゼフ・ガル (Franz Joseph Gall, 1758-1828) による頭蓋観察に端を発し、19世紀前半のヨーロッパ、とりわけイギリスにおいて、一世を風靡した「科学」体系であった。

現在、骨相学はガルの議論と分かちがたく結び付けられており、しばしばガルの議論こそが骨相学であるとみなされ、骨相学について述べるのにガルの名をもって事足りるかのような状況もみられるが、ガルの議論を骨相学として一般に言及される知的体系と同一視することには、以下の理由から、いくつかの問題がある。

第1に、ガルが自らの理論体系を骨相学と呼ぶことを拒絶していたという事実がある。彼自身は、頭蓋学 Schädellehre や器官学 Organologie あるいは脳生理学という名称を使用していた¹⁾。もちろん、思想や理論の名付けに際して、それを論じていた当人の主張を絶対的なものとして受け入れなければならないわけではないが、ガルの議論に関してはこのことの意義は看過されてはならないように思われる。

第2に、こちらが本質的でより重要であり、またガルが骨相学という名称を拒否した理由でもあるが、ガルの議論と続く世代によって「骨相学」として体系化された議論の間には、その実践的含意も含めて、決定的な違いが存在していたからである。この違いはガルとその弟子であったJ・G・シュプルツハイム (Johann Gaspar Spurzheim, 1776-1832) が袂を分かťことになる原因のひとつであった。つまり、骨相学として言及される知的体系にはガルの議論とシュプルツハイム以降の議論があったが、19世紀に骨相学として広範に普及することになったのがシュプルツハイムや、その影響を受けたジョージ・クーム (George Combe, 1788-1858) の議論であったこともあり、一般に骨相学としてイメージされるものに近いのは後者のものとなった²⁾。

この論文では、ガルの頭蓋観察からシュプルツハイムの骨相学への展開をたどり、それぞれの議論の特質を明らかにすることを通じて、骨相学の成立過程の一端を明らかにすることを目的とする。

2. ガルと頭蓋観察

(1) 観相学

ガルの議論の知的背景となっていたのは観相学、解剖学、生理学という3つの知的伝統であった。

彼が観相学に関心をもつきっかけとしてしばしば指摘されるのは、自身が回顧している若い頃の経験であった。ものごとを深く考えることは得意なものの記憶することが苦手であったガルは、ものごとをその内容を理解することなく記憶することができた友人たちの眼が他の人に比べて飛び出ていることから、記憶する能力と眼という器官との間に何らかの関係があるのではないかと考えるようになったという³⁾。

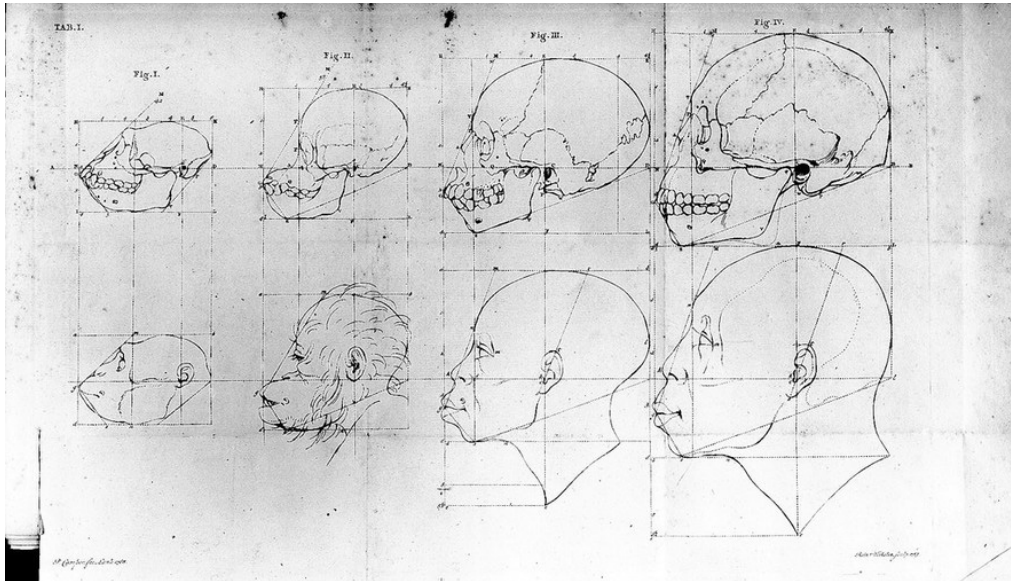
このような個人的な経験とは別に——あるいは、このような個人的経験をもたらした知的背景として——18世紀ヨーロッパにおける観相学への関心の高まりも重要であり、彼の理論はヨーロッパにおける観相学的伝統に倣うものであったということもできる。18世紀後半には、ペトルス・カンパー (Petrus Camper, 1722-1789) の顔面角理論や (『さまざまな年齢や地域による顔の特徴の自然な差異について *Über den natürlichen Unterschied der Gesichtszüge in Menschen verschiedener Gegenden und verschiedenen Alters*』, 1792)、ヨハン・フリードリヒ・ブルーメンバッハ (Johann Friedrich Blumenbach, 1752-1840) による人種理論 (『ヒトの自然的変種 *De Generis Humanis varietate Nativa*』, 1775)、近代観相学を大成したラーヴァター (Johann Caspar Lavater, 1741-1801) の『観相学断章 *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*』 (1775-78) など、観相学に関連する多様な議論が現れ、ガルに先行する形で彼の頭蓋観察を構成するさまざまなアイデアを内包し、ガルの理論へ影響を与えていた⁴⁾。

カンパーの顔面角理論は、横顔による額の角度測定によって、人間や類人猿およびその他の動物を分類するというものであり、それによれば、顔面角には一定の序列が見られ、たとえば、サルは42度、オランウータンは58度、黒人は70度、ヨーロッパ人は80度、古代ギリシア人は100度という具合であった。カンパーの理論は元来は美術理論として構築されており、顔面角を定めたくて目・鼻・口・耳といった細部を調整することで、あらゆる人間の自然な相貌を描くことを可能にするものであったが、この顔面角の序列が同時に美の序列ともなっていた点こそが議論の要であった。すわなち、彼の考えでは、顔面角の前傾の程度が大きいほど美しさと威厳を具えているとされ、それにしたがえば、古代ギリシア人が最高美であり、それに続くのがヨーロッパ人であった (図1)。

この理論についてガルは次のように述べている。

カンパーの試みは当然のように失敗した。線を引き、顔面角を測るという彼のやり方に

図 1 サル、オランウータンおよび人間の顔面角を表した図 (Discours/ prononcés par feu Mr. Pierre Camper, en l'Académie de dessin d'Amsterdam, sur le moyen de représenter d'une manière sûre les diverses passions qui se manifestent sur le visage; sur l'étonnante conformité qui existe entre les quadrupèdes, les oiseaux, les poissons et l'homme; et enfin sur le beau physique: publiés par son fils Adrien Gilles Camper, traduits du hollandais par Denis Bernard Quatremere D'Isjonval. Wellcome Collection. Source: Wellcome Collection.)



よって、前頭部付近に位置している脳の前方部分のみが考慮することができるようになったからである。彼は脳の後部、側部、下部を完全に無視している。この方法では、せいぜい前頭部に位置している器官に局在している能力を確定することができるだけである (Gall 1835, ii, 196, quoted in Finger and Eling 2019, 57-59)。

また、ラーヴァターの観相学の特質は、感情の働きとしての表情を捨象することによって、言い換えれば、一時的な感情の現れに妨げられることなく、顔自体を幾何学的に分析することによって「精神と心の性質」を「科学的に」明らかにしようとした点にある⁵⁾。人間の内面が横顔の輪郭を中心とする頭部の形状に現れると考えたラーヴァターは、観相学的観察に供されるあらゆるもののなかで最も重要なものとして前頭部に着目し、その特徴が人間の知性とどのように関係しているかに関心を向けた。

牧師でもあったラーヴァターの関心は、「神の象り」としての人間の顔相に神の表徴を読み取ろうという宗教的なものであり、人間および動物がもつ個々の能力を発見することを試みたり、それを脳の機能と関連づけたりその局在を論じたりしようとしたガルとは異質のものであった。それでも、ガルの議論はラーヴァターの「科学化」の志向をさらに推し進めよ

うとしたものであって、その意味でラーヴァターの議論はガルの理論の出発点を提供したということもできるだろう。

ガルの考えでは、カンパーであれラーヴァターであれ、それまでの観相学的議論の欠点は、表象に着目する際に頭蓋の内部の構造への洞察を欠いており、それゆえに「科学的」な基礎づけが不十分であるという点にあった。以下で見るように、ガルは解剖学および生理学に基づいた脳に関する医学的知識によって、観相学に強固な「科学的」基礎づけを与えようと試みることになる。

(2) 解剖学

ガルが観相学的な関心を抱きつつ、脳の解剖学や生理学について知識を深めていったのは、ストラスブール大学やウィーン大学で医学を学んで以降のことであった。ウィーン大学卒業後は、ウィーンで医師として開業し、多くの患者の診察をおこなうなかで、頭蓋の形状と精神的特質の間の相関関係への確信を深め、観相学への関心を解剖学および生理学という医学的知識と結びつけ、頭蓋骨の収集などもおこないながら、その実証のための研究を進めていくことになる。

解剖学について重要なのは、彼がウィーン在住の頃から脳解剖学者として名を馳せていたという事実である。彼は、イタリアの解剖学者バティスタ・モルガーニ（Giovanni Battista Morgagni, 1682-1771）の『解剖によって明らかにされた病気の座と原因 *De sedibus et causis morborum per anatomen indagatis*』（1761）などを踏まえつつ、中枢神経系に着目し、すべての脊椎動物のあいだで不変な構造となっている脊髄の拡張部分としての脳の神経系の構造を明らかにすることに傾注した。

この目的のために、彼は脳の解剖手法に工夫を施し、たとえば、線維の方向性に注意して、それを切断しないように細く割っていく手法を最も早く始めた1人であったと言われている。彼はこの手法によって嗅神経、動眼神経、三叉神経、外転神経の起源が神経節にあることを見出したり、灰白質と白質、さらに線条体を峻別し、白質線維の端が灰白質であることを発見したりしている。また、脳神経の起始部が灰白質であることを明らかにするとともに、脳は伝導路としての白質線維によって結びついた灰白質群であり、精神活動を司っているのは灰白質部である皮質にほかならないという考えにたどりつき、それまで重要な意義をもつとは考えられていなかった脳——とりわけ大脳——の皮質の重要性を明らかにした。ここで、彼は皮質に存在する襞の様相すなわち脳回や脳溝に目を向けるのではなく、脳の外套としての皮質の形態的な連続性・均質性を重視し、したがって脳の3次元的・立体的理解ではなく、2次元的・平面的把握による作図を試みるようになった。

灰白質は脳にかぎらず中枢神経系の他の箇所にも見られるものであるから、しがってそれは単に脳に偶発的に存在するものではなく、「神経の母体」というべきものであった。ガル

の考えでは、身体のあらゆる要素は末梢神経系によって脊髄および脳幹の灰白質に結合され、脊髄および脳幹の灰白質は中枢神経系によって脳（特に大脳）の皮質にある灰白質に結合されるという構造になっていた。こうして、脳は身体その他の器官と神経系によって結合されている一器官として、その他の器官と同じ地位に引き下ろされ、いわば脱神秘化されることになった。

(3) 生理学

生理学について、ガルがウィーン大学の医学生だった頃に支配的だったのは、アルブレヒト・フォン・ハラー（Albercht von Haller, 1708-1777）に代表される、脳のすべての部分は同じように感覚と運動に寄与しているとする考え方であった。ガルは自らの観察も踏まえて、脳は肝臓のようにどこを切っても同じ機能を果たしているのではなく、異なる領域がそれぞれに異なる機能あるいは能力を担っているのではないかと考え始めるようになった。こうして、ガルにとって生理学の課題は、行動の経験的観察によって個々の機能あるいは能力を同定したうえで、それらと脳（より限定すれば、大脳皮質上）のそれぞれの領域の間の関係を確立することになった。

この時に前提となったのは、人間や動物には一定の生得的能力が存在しており、これらの能力は行動の経験的観察によって認識できるという考えであった。それらの生得的能力は相互に独立しており還元不可能なものであるとされ、人間や動物の行動や習性は、これらのさまざまな生得的能力が複合的に作用したことの結果であり、環境や偶然によって一定の変容をこうむることがあるとしても、その生得的要素が本質的に変化することはないとされた。

それでは、行動や習性をもたらす生得的能力の物質的条件はどのようなものと考えべきなのか⁶⁾。ガルはこの点について、それが身体現象である以上、身体のいずれかの器官に求められなければならないと考えた。ガルは大脳損傷患者による運動障害や感覚障害を題材にしながら、大脳があらゆる精神作用に関わっていることを指摘し、また肢体を切断した患者が失った肢体の痛みを錯覚する事例に言及し、その痛みが大脳の機能によるものであると主張した。一方で、行動の分化の高い動物ほど、大脳皮質の面積が広く、その構造も複雑となっていること、人間が大脳皮質に損傷を受けると、その程度に比例した行動障害が発生することなどを理由に、生得的能力に関して大脳以外の他の器官が同じような役割を果たす可能性を否定した⁷⁾。

(4) 機能局在論へ

これらの解剖学的・生理学的知見こそが、脳機能局在論——より正確に言えば、大脳皮質機能局在論——につながることになる画期的な着想であり、これらが観相学的アイデアと結びつくことによって、頭蓋観察による性格診断という理論がもたらされることになった。た

だし、ここで解剖学および生理学という医学的知識が観相学的関心という、それ自体としては必然的つながりをもたない要素を結びつけられて頭蓋観察として体系化するためには、生得的能力を具体的に同定すること、そしてそれらがそれぞれ大脳皮質のどの領域と対応しているかを明らかにするという2つの作業が必要となった。

ガルによれば、頭蓋骨の形状はそれに覆われている脳の皮質の発達の程度にしたがっているから、頭蓋骨が突出している箇所の下には発達した皮質部が存在していると考えられた。そして、皮質が発達していることが意味しているのは、その部位に局在している生得的能力が高いということに他ならなかった。

彼は能力を見つけ出すために、行動を大量に観察するという作業をおこなった。観察によって、その行動をもたらした何らかの能力や性向の存在を想定したうえで、その行動主体の頭部の形状を観察して（可能ならば直接の触診によって）共通する特徴を見出し、能力や性向と頭蓋の形状を関連づけた。たとえば、処刑された殺人者の頭部を観察し、耳の後部に著しく発達した箇所を見出し、そこに「殺人・破壊願望」という能力が局在しているとみなした。これは過去の人物についても同様であって、まずある人物の伝記や事跡について調べ、なんらかの特異な能力や性向が発現していることを確認する。その次にその人物の頭部の特徴を、可能であれば頭蓋骨を用いて、そうでなければ彫像などを用いて、明らかにする。そのうえで、能力や性向と頭部（頭蓋）の形状を関連づけたのであった。

こうして、ガルは1790年代半ばまでには、「頭部や頭蓋の形状によっていくつかの気質や性向の識別することの可能性」を確信するようになり⁸⁾、1796年には自宅で頭蓋観察についての講義を開始するとともに、1798年には、オーストリアの作家で検閲官を務めていたヨーゼフ・フリードリヒ・レッツァー宛の書簡という形で、その理論の概要をまとめた論考を公開した⁹⁾。

この論考では彼は最初に以下のような7つの原理を提示した¹⁰⁾。

1. 人間および動物において能力や性向は生得的である。
2. 人間の能力や性向はその座を脳にもっている。
3. 能力は性向から区別され独立しているだけでなく、能力同士、性向同士も本質的に区別され独立している。
4. それゆえにそれらは脳のそれぞれに区別され独立した部分に座をもっていなければならない。
5. さまざまな器官の配置およびそれぞれの多様な発達の仕方は脳の形状からわかる。
6. 脳全体あるいは局部の形状は、画定された器官の発達の度合いに起因する。
7. 頭骨の形成時から最成熟期にいたるまで、頭蓋の内表面の形状は脳の外形によって決定され、また頭蓋の外表面と内表面は基本的に一致している。

この論考では、これらの原理を踏まえつつ、能力や性向をどのように確定していくかという問題についても簡単に述べられている。その方法は経験的なものであり、たとえば、すでに確定されている資質が見出される時にその人の頭部に盛り上がりや落ちこみを探し出すこともあれば、ある資質の存在を頭部における隆起の存在と結び付けることもある。この観察は、実際の人間や動物についてだけでなく、収集した彫像や頭蓋骨についてもなされた。また、脳の損傷と精神障害のような現象の関連も重要な論拠であった。

こうして、自らの理論の大枠を提示した上で、彼は自らが頭蓋学者 *Kranioskopen*、その理論が頭蓋学 *Kranioskopia* と呼ばれることに否定的見解を示し、次のように述べている。

私の研究の対象は脳である。頭蓋は脳の外形を忠実に型どったものでしかなく、したがって主要な対象のごく一部にすぎない。それゆえこの肩書きは、詩人に対して韻を踏む人という肩書きを与えるようなものであり、ふさわしくない (*Gall 1835, i, 18*)。

代わりに彼は自らを観相学者と呼ぶが、その観相学はこれまで見てきたように、あくまでも解剖学と生理学に基礎づけられたものであり、それゆえに後に彼は自らの理論を脳生理学と称するようになる。

この論考では個々の能力の詳細については言及されていないが、彼は最終的に、①人間と脊椎動物に共通するもの、②人間と高等脊椎動物に共通するもの、③人間のみが有しているもの、という3つに分類される以下の27の能力を提示したうえで¹¹⁾、それらが脳皮質のどの部分に局在しているかを示すことになる。①に分類される能力は主に大脳の後方下部および小脳に、②の能力は下部前頭葉に、③の能力は上部前頭葉に、それぞれ局在しているとされた(表1および図2)。ガルは、人間の精神はこれらの多くの能力の組み合わせによって生じるものと考え、これまでの多くの哲学者の議論が精神を知性と意志という2つの一般的な能力のみに還元してしまってきたとして批判した¹²⁾。

上述のように、この論考が公刊される以前の1796年から、ガルは自らの理論の普及のためにウィーンの自宅で講義をはじめており、多くの聴衆を集めていた。しかし、彼の理論が知られるようになると、その理論が唯物論的・反キリスト教的傾向をもっているとして批判を受けるようになり、1801年に神聖ローマ帝国皇帝フランツ2世によって、ウィーンでの講義や出版を禁じられることになった。

そのため、ガルは1805年から1807年にかけてヨーロッパ大陸各地をめぐる講演旅行におこなって成功を収め、1807年秋以降はパリに移住し、そこで研究をすすめることになった¹³⁾。この講演旅行に同行し、またパリでの研究を共にすることになったのが、シュプルトハイムであった。

表 1 ガルによる能力一覧

人間と脊椎動物に共通するもの	1 生殖本能
	2 子供への愛情または親心
	3 友情や貞節
	4 勇気, 自己防衛本能
	5 殺人, 破壊願望
	6 狡猾
	7 窃盗, 所有欲
	8 自尊心, 傲慢, 權威愛
	9 野心, 虚栄心
	10 注意深さ, 思慮分別
人間と高等脊椎動物に共通するもの	11 教育適性, 現実記憶
	12 空間感覚
	13 人物記憶
	14 言葉に対する感覚, 語彙記憶
	15 言語感覚
	16 色彩感覚
	17 音および音楽に対する感覚
	18 数の感覚, 時間の感覚
人間のみが有しているもの	19 芸術感覚, 構成感覚
	20 比較理解
	21 形而上学的洞察
	22 機知, 因果, 推論
	23 詩的能力
	24 善良, 思いやり, 道德感覚
	25 模倣
	26 宗教心
	27 忍耐, 堅固

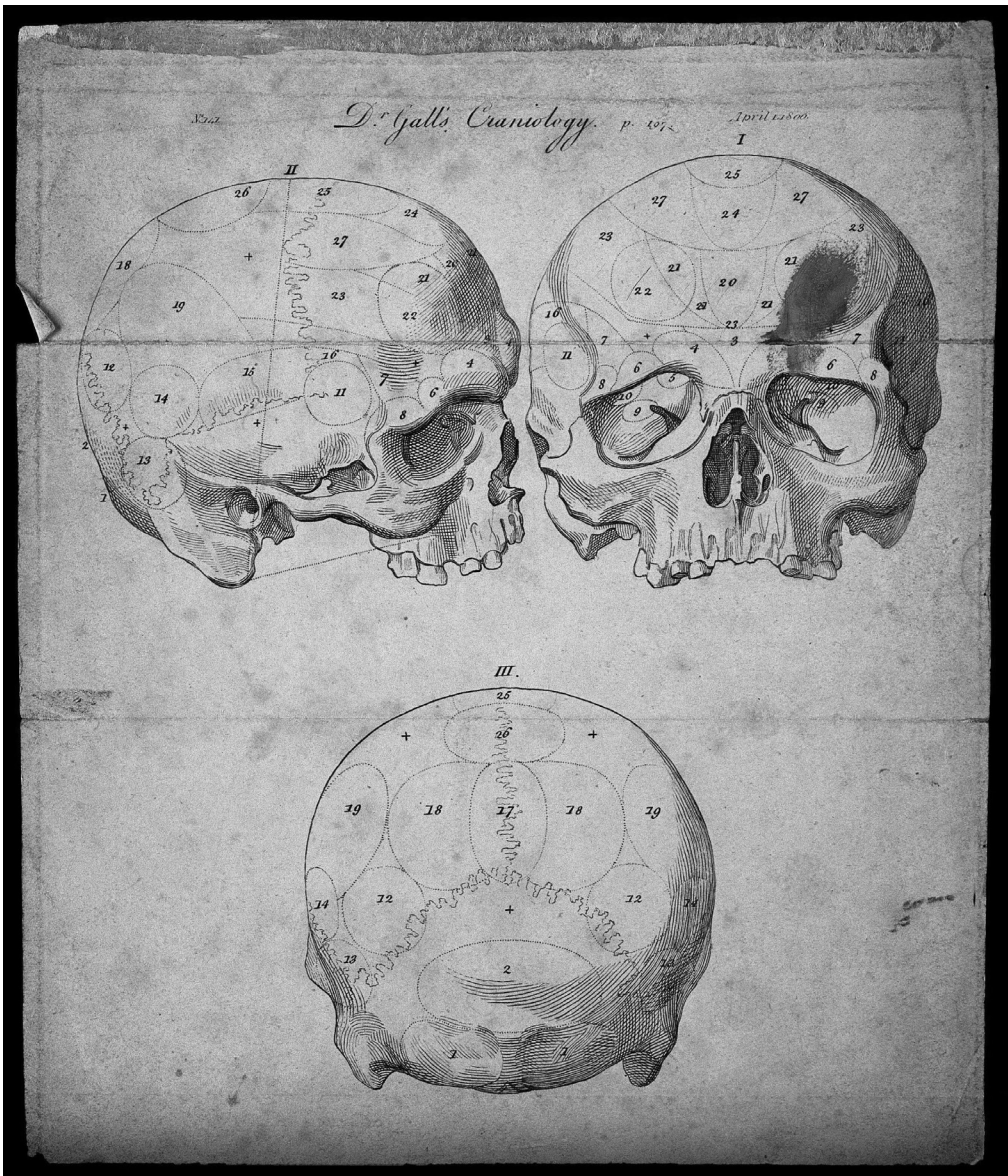
Wyhe (2002) 213 を元に作成

3. シュプルツハイムと骨相学の創出

(1) イギリスでのシュプルツハイム

ドイツ最古の街として知られるトリアーからほど近いロングイヒで生まれ、トリアー大学

図 2 ガルの分類に基づく機能の局在図 (Three perspectives of a skull sectioned and numbered according to Gall's system of phrenology. Engraving, 1806. Source: Wellcome Collection)



で神学と哲学を学んだシュプルツハイムは、フランスのトリア占領によって 1798 年に大学が閉鎖された翌年、ウィーンに移り住み、そこで医学を学ぶことになった。当地でガルが主治医を務めていた貴族の息子の家庭教師をしていたことがきっかけとなって、1800 年にガルと知り合うとともに、その理論に魅了された彼は、1801 年 12 月にウィーンでのガルによる講義が勅令によって禁止されるまで、熱心に講義を受け続け、1804 年にガルの秘書兼

助手というべき立場となり、1805年3月からはガルのヨーロッパ大陸をめぐる講演旅行に同行することになった。1807年以降、ガルとシュプルツハイムはパリに拠点を移し、引き続き共同で研究するようになったが、1809年頃には両者の関係はより対等に近いものになっており、この協力関係は1810年に共著として公刊された『神経系の解剖学と生理学』第1巻に結実した¹⁴⁾。

それまで緊密な協力関係にあったガルとシュプルツハイムの関係が決裂したのは1813年にパリにいた時であった。このことの正確な理由についてはさまざまに指摘されており決定的なものはないが¹⁵⁾、いずれにしろガルと袂を分かったシュプルツハイムは、1814年3月にイギリスへ渡り、かつてガルとともにヨーロッパ大陸でおこなっていたような講演旅行を、今回はイギリスで単独で試みるようになった。このイギリスでの活動のなかで、シュプルツハイムはガルの理論を修正し、現在骨相学として一般に想起されるような知的体系を提示することになる。以下では、ガルとの相違を中心にシュプルツハイムの議論の特質について述べていくことにする。

(2) シュプルツハイムのひねり

シュプルツハイムはイギリスで普及を試みようとした理論について、それまでガルが使用していた、あるいはガルと直接的に結びつけられてきていた名称ではなく、「ガルおよびシュプルツハイム両博士の観相学体系 The Physiognomical System of Drs Gall and Spurzheim」と称した¹⁶⁾。

このことは以下の2つの点で興味深い。第1に、イギリスにおいてガルの理論が紹介される際にはガルの名前のみが単独で言及されるのが一般的であったなかで、ガルとシュプルツハイムの名前を併記するこの呼称によって、ガルと自らを対等な関係として、いわば理論体系の共同発見者として、位置づけようとするシュプルツハイムの意図がくみとれることである。

第2に、シュプルツハイムが自らの体系を性格の外的判断術というべきものへと変質させていく、関心あるいは力点の微妙な変化——このことが、後のイギリスにおける骨相学の普及の大きな要因となった——をうかがうことができることである。観相学の側面をもちつつも、あくまでも生理学として理論体系を提示しようとしていたガルに対して、シュプルツハイムは観相学的側面を強調することによってイギリスで自らの理論の普及を図ることになる。

1815年に出版した『ガルおよびシュプルツハイム両博士の観相学体系』において、シュプルツハイムは次のように述べている。

この本それ自体が、この主題に関して他に出版されることのなかった過去数年の間に私たちの理論を私がどれほど改善したかを示してくれるだろう。私は今では、私たちの大

著に今後付け加えられていくことになるものは、ガル博士がその講義で習慣としていたよりも、より科学的な配列を取らなければならないし、より哲学的な方法で考察されなければならないと考えるようになっている (Spurzheim 1815, vi-vii)¹⁷⁾。

このようなシュプルツハイムにとって、フォスターが用いた「骨相学」という、使い古されていない新しい用語は自らが創出したと謳う理論体系を示すものとして都合の良いものであったように思われる。

(3) 能力分類の刷新

シュプルツハイムとガルの相違が特徴的に現れているのは、具体的な能力の名称と内容、その数、それらの分類の仕方においてであり、そこからシュプルツハイムが「科学的な配列」とか「哲学的な方法」と述べていたものを理解することができるだろう。

シュプルツハイムはガルの能力リストに修正を加えたうえで、1815年には33の能力を提示していた。その後、名称の若干の変更もともないつつ (たとえば、1815年には自己愛 self-love となっていたものが、1825年には自尊心 self-esteem となっている)、1825年段階では35の能力となった¹⁸⁾。

シュプルツハイムはこれらの能力について、上述したガルの分類法 (①人間と脊椎動物に共通するもの、②人間と高等脊椎動物に共通するもの、③人間のみが有しているもの) によってではなく、リンネ式の階層分類法にしたがって、目・属・種という表現を用いて分類することを試みた¹⁹⁾。

そもそも、シュプルツハイムはガルによる能力の発見および命名の方法に対しても批判的であった。シュプルツハイムの考えでは、行為は複数の能力が同時に発現したことの結果であって、特定の行為をある特定の能力の発現とみなすことはできない。一方、「ガルは人間の主要な行為に基づいて特定の器官について調べ、それらの行為に基づいて器官を名付けていた」(Spurzheim 1815, 279)。たとえば、ガルは数学者や音楽家、詩人を観察し、その脳に他に較べて発達している部位を見出すと、その部位を数学の器官、音楽の器官、詩の器官などと呼んだ。また、ガルは窃盗 larceny や殺人 murder という能力を挙げ、脳におけるそれらの局在を指摘したが、シュプルツハイムに言わせれば、窃盗や殺人という行為が観察されたとしても、それらの行為をただちに窃盗や殺人という能力の発現とみなすことは適切ではない。また、窃盗や殺人という能力が局在しているとされた特定の部位が発達しているからといって、すべての人間が窃盗をしたり殺人をしたりするわけでもない。したがって、窃盗や殺人という行為は、特定の能力がそのまま発現したものともみなすよりも、特定の状況下で、闘争性 destructiveness や貪欲性 Acquisitiveness といった能力が正しく用いられずに誤用された結果とみなすべきだというのがシュプルツハイムの考えであった²⁰⁾。

シュプルツハイムは、能力の名称は「なんらかの一定の行為」ではなく「その能力を指し示す」ものであるべきであるとしたうえで²¹⁾、能力の発現におけるその正用 use と誤用 abuse という区分を用いて、次のように述べている。

能力の誤用に基づいて器官が名づけられるべきではないことは明らかである。貪欲や酩酊はいずれかの組織に依存しているが、貪欲や酩酊の器官があると言われることはない。色情の乱れ abuse はいずれかの組織に依存しているが、この能力の乱れの器官については誰も語ることはない。以下で示すように、窃盗や殺人の器官についても同様である。これらの機能は、別の能力によって統制されてはいないいずれかの諸器官が最高度に活動することによって生じた逸脱 abuse である。したがって、他の器官が非常に小さいのにある器官が極端に発達している場合のみを識別していたガルは、常習の泥棒に特定の組織があることを観察した。これは確かに常に事実であり、前述したように、ガルはこの器官をその誤用に基づいて命名したことだけが誤りであった。さらに、ガルは研究に際して、さまざまな器官にともなう特定の行動について観察しただけであり、その特別な能力を確定したわけではなかった。それゆえ、あらゆる器官に関して、その活動範囲がわからないというのが彼の不満であった。彼の観察の仕方は必要不可欠なものであって、この教説を解明し、他のすべての物理的・道徳的真理と一致させる哲学的考察への道筋を整えた (Spurzheim 1815, 280-281)。

このように述べたシュプルツハイムは「自然と知恵は同じことを語るだろう *Nihil aliud natura, nihil aliud sapientia dicet*」という言葉を挙げ²²⁾、独自の方法による命名を試みた。すなわち、彼はその能力が生み出すものの性質を表現するための接尾辞 *ive* と、それを抽象化する接尾辞 *ness* を合わせた *iveness* という語尾を付すことによる造語も積極的に用いながら、能力の発現としての行為を表すのではなく、能力の本性を想起できるような名称を付与しつつ、全体として統一性をもった能力リストの提示をおこなった (表2および図3)。

このようにして命名・分類された能力について、その正用と誤用を区別するシュプルツハイムの意図は明らかである。

悪い能力というのは存在するのか？ ガル博士は邪悪な性向を認めがちであった。彼が言うには、人間は肉体的悪についても道徳的悪についても創造に関する法則に従っていなければならないし、誘惑に負けないと言えるような人間はいない。さらに、すべての思考や傾向性が純真であったり有徳であったりするわけではない。彼は道徳的悪は創造主の計画の一部であると考えてさえいる。

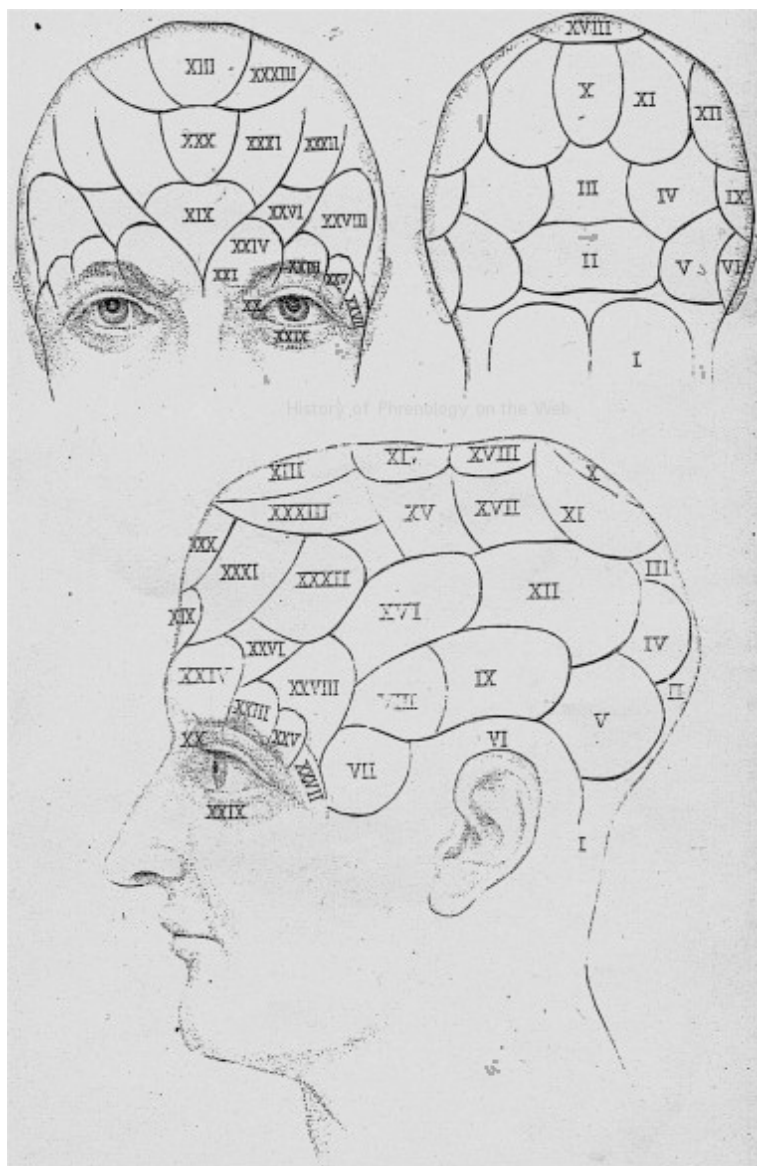
しかし、もし彼が特定の能力の過剰な活動が非合法的行動や道徳的悪を生み出すと言

表 2 シュプルツハイムによる能力一覧

目	属	種
情動的能力	性向	1 好色性 Amativeness
		2 慈悲性 Philoprogenitiveness
		3 居住性 Inhabitiveness
		4 愛着性 Adhesiveness
		5 闘争性 Combativeness
		6 破壊性 Destructiveness
		7 秘密性 Secretiveness
		8 貪欲性 Acquisitiveness
		9 構成性 Constructiveness
	情操	10 自尊心 Self-esteem
		11 名誉愛 Love of approbation
		12 警戒 Cautiousness
		13 慈愛 Benevolence
		14 崇拜 Veneration
		15 堅固性 Firmness
		16 誠実性 Conscientiousness
		17 希望 Hope
		18 驚嘆性 Marvellousness
		19 理想 Ideality
		20 愉快性あるいは陽気性 Mirthfulness or Gayness
		21 模倣 Imitation
知的能力	外的感覚	随意運動 Voluntary motion
		感情 Feeling
		味覚 Taste
		嗅覚 Smell
		聴力 Hearing
		視覚 Sight
	知覚的能力	22 個体 Individuality
		23 形状 Configuration
		24 大きさ Size
		25 重さと抵抗 Weight and resistance
		26 色彩 Colouring
		27 位置 Locality
		28 計算 Calculation
		29 秩序 Order
		30 事象 Eventuality
		31 時間 Time
		32 旋律 Melody
		33 言語 Language
	内省的能力	34 比較 Comparison
		35 因果 Causality

Spurzheim (1825a) 302-303 を元に作成

図3 シュプルツハイムの分類に基づく機能の局在図（出典：Spurzheim 1815）



うのであれば、道徳はいまだに自然科学として認められていないということになる。せいぜい慣習的なものにすぎない。私は次のことを深く確信している。能力はそれ自体として悪いものではありません、人間が生得的にもっているあらゆる力には何らかの目的があること。すべての人が必要とされていること。誰も必然的に悪になるわけではないが、誤用することはありうること。能力は、自然界の他の存在と同じように、悪いものではない（Spurzheim 1825b, 133-134）。

シュプルツハイムの議論では、本性としての能力すなわち自然な能力が想定されており、その自然な能力は望ましいものであった。それゆえ、それらの発現としての行為が望ましくないものであったとしたら、それは能力の誤用によるものであり、したがって問題はそのような能力の誤用をもたらした環境にあるということになる。シュプルツハイムのこの認識は、もともと性格の生理学的決定論という特質をもっていたガルの理論が、性格の可変性を強調し、そのための手段としての教育を重視する骨相学へと変容することになる決定的な要因であった。そして、このことによって、骨相学は教育や性格形成という実践に「科学的」な基礎づけを与える科学として——性格の固定性を強調する議論としてではなく、教育による性格の形成・修正の可能性を強調する議論として——広範な影響をもつことになった。

4. おわりに

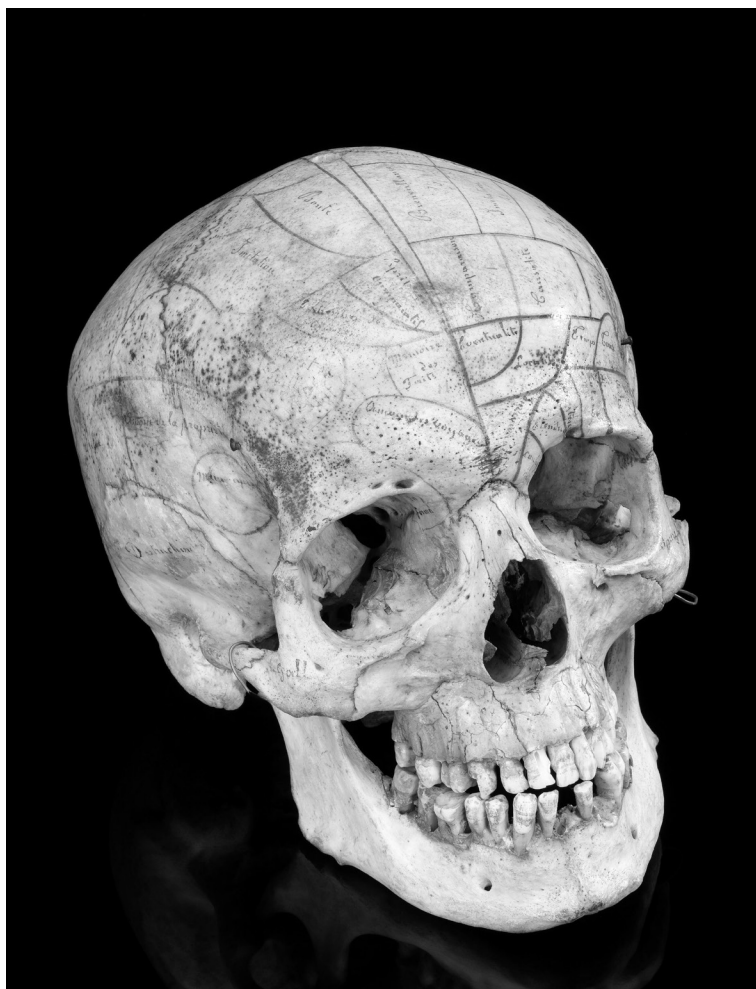
ガルの理論は、観相学的関心を解剖学および生理学という医学的知識と結びつけることによって生まれたものであって、彼は脳の解剖学的研究を通じて大脳皮質の重要性を認識し、生理学的考察によって脳機能局在論を展開し、人間や動物の行動を観察することで27の生得的能力を同定し、それらが脳皮質上の特定の領域にそれぞれ局在していると主張した。

一方、このガルの理論に修正をほどこし、現在一般に骨相学として想起される体系を提示したのがシュプルツハイムであった。彼はガルの能力リストを最終的に35にまで拡張し、それらをより階層分類的な形で整理した。また、シュプルツハイムは能力の「正用」と「誤用」という概念を導入し、人間の自然な性格を望ましいものとみなした(図4)。

ここまで見てきたように、ガルとシュプルツハイムの間には以下のような相違がある。まず、シュプルツハイムが1810年代後半に採用することになった骨相学という名称について、ガルはけっして認めようとはしなかった。そして、能力の同定と命名に際しても、ガルが具体的な行為から能力を同定し、その行為に基づいて能力を命名していたのに対して、シュプルツハイムは能力の「本性」を抽象的に表現することを意図して、命名に際しても統一的方法を採用していた。また、能力に分類については、ガルは人間と動物の共通性に基づいて分類していたが、シュプルツハイムはリンネ式の階層分類法を採用していた点も、両者の相違として重要である。さらに、ガルの理論が主に生理学的な関心に基づいていたのに対し、シュプルツハイムの理論はより実践的な性格判断術としての側面を強調する傾向があったことも指摘しておくべきだろう。

これらの相違点は、骨相学が医学的な基礎を持ちつつも、より一般大衆に受け入れられやすい実践的な性格判断法へ、さらには教育論へと変容していく過程を示しており、シュプルツハイムによってガルの議論に加えられたひねりは、骨相学がイギリスを中心に広く普及する要因となり、次代のジョージ・クームらに引き継がれていった²³⁾。

図4 ガルとシュプルツハイムによる能力の局在を書き込んだ頭蓋骨（図の左がガルの議論に、右がシュプルツハイムの議論に、それぞれ基づいている）（Human skull inscribed for phrenological demonstration. One half accords with Gall's theories, the other, Spurzheim's. Probably of French origin. Wellcome Collection. Source: Wellcome Collection）



謝辞

本研究は2023年度東京経済大学個人研究助成費（受給番号23-08）の助成による研究成果の一部である。

注

- 1) Wyhe (2004) 17.
- 2) Noel and Carlson (1970) によれば、「骨相学」の原語である Phrenology という用語を初めて用いたのは、ベンジャミン・ラッシュであった。ラッシュは1805年に、「心の科学」すなわち

心理学全般を意味するものとしてこの用語を用いたが、ラッシュによるこの用法は普及することとはなかったとされている。そして、phrenology が骨相学を指すものとして用いられるようになったのは 1815 年以降のことであった。きっかけとなったのは、シュプルツハイムの友人でもあったトマス・フォスターがこの言葉によってガルとシュプルツハイムの議論に言及したことであり (Forster 1815), まもなくシュプルツハイムがこの用語を採用するとともに、1810 年代後半にはこの名称が人口に膾炙するようになった。

- 3) Gall (1835) i, 58.
- 4) 浜本他編 (2008); 平野 (2015) 59-70; 森 (2015); Finger and Eling 2019, 49-69 などを参照のこと。
- 5) この点に関連して、ラーヴァターは、血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁という 4 種類の体液に多寡によって人間の気質が決まるとする、古代以来の四体液説を批判した。
- 6) 議論の簡便のために、しばしば能力がある部位に局在しているという表現をするが、ガルの議論では、ある能力が生じるためには特定の部位が物質として必要とされているのであって、脳の特定の部位に能力が存在しているということを述べているわけではない。つまり、ある部位に特定の能力が局在しているという表現で意味しているのは、その部位がその能力が発現するための物質的条件になっているということである。
- 7) ガルの解剖学および生理学についてのここまでの説明は、Hecaen and Lanteri-Laura (1983) 34-43 によっている。また、あくまでもガルがどのように認識していたかを説明するものであり、現代の医学的見地からみて正確かどうかは関心をもっていない。
- 8) Gall (1835) i, 7.
- 9) Gall (1798). この論文の英語訳は、Gall (1835) i, 7-19 にある。
- 10) Gall (1835) i, 8-14.
- 11) Gall (1835) i, 41.
- 12) Gall (1835) i, 80ff; 平野 (2015) 103-104.
- 13) この旅行については、Whye (2004) 209-211 にまとめられている。
- 14) Gall and Spurzheim (1810). なお、第 2 巻は共著として 1812 年に、第 3・4 巻は 1818 年および 1819 年にガルの単著として公刊された。
- 15) Whye (2004) 26-31.
- 16) Spurzheim (1815).
- 17) Cf. 「この新しい心理学体系の目的は、それゆえ、神経系一般の、特に脳の構造と機能について調べることである。この科学はとりわけ人間本性の知識に対して貢献するものである。」(Spurzheim 1815, 1)
- 18) Spurzheim (1815) 569-570; (1825a) 302-303. また、割り振られた番号の変更もあったが、これはシュプルツハイムが能力を分類する際の便宜のためであり、ここでの議論にとっては重要なものではない。
- 19) Gall (1835) i, 42. この点については、平野 (2015) 107ff. も参照のこと。
- 20) Spurzheim (1815) 279-281.
- 21) Spurzheim (1815) ix. Cf. Spurzheim (1825b) 122: 「したがって、私は行動に基づいて器官に名称を付けるのではなく、能力の本性のみに基づいて名称を付ける。」この点については、平野 (2015) 104-106 を参照のこと。

22) Spurzheim (1815) viii.

23) 自らの理論と異なるシュプルツハイムの理論が、しばしば自らの名前と結び付けられてイギリスで普及していることに不満を抱いたガルは1823年にロンドンを訪れ、自らの理論についての講演活動をおこなったが、彼が期待していたほどの聴衆が集まることはなかった。ガルの理論とシュプルツハイムの理論の違いの重要性や含意を正しく認識できた人々の数は限定的であっただろう。なお、ガルの著作が英語で最初に出版されたのは、ガルとシュプルツハイムがともに没した後の1835年に *On the Functions of the Brain and of Each of Its Parts: With Observations on the Possibility of Determining the Instincts, Propensities and Talents, or the Moral and Intellectual Dispositions of Men and Animals, by the Configuration of the Head*, 6 vols, Boston, 1835 が、フランス語で書かれた *Sur les fonctions du cerveau et sur celles de chacune de ses parties. avec des observations sur la possibilité de reconnaître les instincts, les penchans, les talens, ou les dispositions morales et intellectuelles des hommes et des animaux, par la configuration de leur cerveau et de leur tête*, 6 vols, Paris, 1822-25 の英訳として出版された時のことであった (Tomlinson 2005, 75)。

参 照 文 献

- Finger, S. and Eling, P. (2019) *Franz Joseph Gall: Naturalist of the Mind, Visionary of the Brain*, Oxford.
- Forster, T. (1815) *Sketch of the New Anatomy and Physiology of the Brain and Nervous System of Drs. Gall and Spurzheim, considered as comprehending a complete system of Zoonomy. With observations on its tendency to the improvement of education, etc. Reprinted from the Pamphleteer, with additions*, London.
- Gall, F. J. (1798) 'Des Herrn Dr. F. J. Gall Schreiben über seinen bereits geendigten Prodrömus über die Verrichtungen des Gehirns der Menschen und Thiere an Herrn Jos. Fr. von Retzer', *Der neue Deutsche Merkur*, 3, Dec. 1798, pp. 311-332.
- Gall, F. J. (1835) *On the Functions of the Brain and of each of its Parts: with observations on the possibility of determining the instincts, propensities, and talents, or the moral and intellectual dispositions of men and animals, by the configuration of the brain and head*, 6 vols, trans. by W. Lewis, Boston.
- Gall, F. J. and Spurzheim, G. (1810) *Anatomie et physiologie du système nerveux en général et anatomie du cerveau en particulier, avec des observations sur la possibilité de reconnaître plusieurs dispositions intellectuelles et morales de l'homme et des animaux, par la configuration de leurs têtes*, vol. 1, Paris.
- Hecaen, H. G. and Lanteri-Laura (1983) 『大脳局在論の成立と展開』浜中淑彦・大東祥孝訳、医学書院。
- Noel, P. S. and Carlson, E. T. (1970) 'Origins of the Word "Phrenology"', *American Journal of Psychiatry*, cxxvii, 694-697
- Spurzheim, J. G. (1815) *The Physiognomical System of Drs Gall and Spurzheim; founded on Anatomical and Physiological Examination of the Nervous System in general, and of the Brain*

- in particular and indicating the Dispositions and Manifestations of the Mind*, London, London.
- Spurzheim, J. G. (1825a) *Phrenology, or the Doctrine of the Mind and of the Relations between its Manifestations and the Body*, London.
- Spurzheim, J. G. (1825b) *A View of the Philosophical Principles of Phrenology*, London.
- Tomlinson, S. (2005) *Head Masters: Phrenology, Secular Education, and Nineteenth-Century Social Thought*, University of Alabama Press.
- Wyhe, J. van (2004) *Phrenology and the Origins of Victorian Scientific Naturalism*, Routledge.
- 森貴史 (2015) 「カンパーの顔面角理論からナチスの人種論へ」, 『欧米社会の集団妄想とカルト症候群』 明石書店.
- 浜本隆志・柏木治・森貴史編 (2008) 『ヨーロッパ人相学——顔が語る西洋文化史』 白水社.
- 平野亮 (2015) 『骨相学——能力人間学のアルケオロジー』 世織書房.